

「野暮な事云ひないナ。親爺はあゝして出て往たら減多に今日中に歸つて來やへんがナ。ほんまに二時間て屹度歸つて來る。頼みや。出してんか。」

「折角でおますがお斷り申します。お留守中は私が凡て預かつとりますので、一寸も出て戴けまへん」

「さアそこを頭さげて頼むのや依てに……。」

「いきまへん。」

「ま、そない云はんと。」

「成りまへんツ。」

「ア、そうか。いやコリヤ仕様が無い。そんなら諦めよ。時に番頭、内らで一人ボンヤリ坐つてゝも又碌な事考へやへんさかいなア。此處へ坐つて話をさして貰ふてゝもかまやへんか。」

「へエ〜。いや大事ムりまへんとも、お店に坐つてゝ戴きますれば、御近所が御覽になりましても豪い體裁が宜しうムります。甚い片意地に申しまして濟みまへんが、どうぞ御腹立の無い様に。」

「何云ふてんね俺いの方が無理云ふて濟まなんだ。然し帳合ひの邪魔になれへんか。」

「いえ是れは別に今で無うてもかまはん帳合ひで。」

「いや、そらいかん。俺いが店で喋つて仕事の邪魔してると思ふと氣兼ねで叶はん、どうぞ帳附けをし乍ら聽てゝんか。」

「ア、左様で。へエ。そんなら甚い失禮でござすが、御免蒙りまして、帳附けし乍ら承らして戴きます。」

「ア、左様して〜。然し毎日御苦勞はんやなア。店の切盛からお得意先との交際萬端。大ていや無いやろ。」

「恐れ入ります。」

「お得意先でも内の親爺より、お前の方が信用が有ると云ふ事や。」

「エへへ、そんな事もごわへんが、何せえ十四の時から御奉公をして居りますので……。」

「つまり内の白鼠や、處がなア番頭、世間には表面忠義相に見せといて、内實とても悪い番頭もある相やなア。」

「さア、そう云ふお方も有る相にござすなア。」

「實は確かに一人だけ知つてるのやがナ。これが今云ふた奴で、チヨツと見た處では逆も忠義な白鼠や。處でなア。裏から覗いて見るちうと仲々どうして此奴が仕様のないドブ鼠やね。」

「へエ〜。」

「堀江や新町へ人に隠れてチヨイ〜内密遊びに往てよる内に一人氣に入つた妓が有つてナ。其妓を落籍して淀屋小路邊りで小意氣な家を借つて圍ふたアるね。時々得意廻りに出る様な顔して店を脱